平成 25 年 4 月 2 日（火）14：00〜17：15

FD 研修「信州大学の教育について」

配布資料リスト

１．高等教育研究センターのあらまし/FD のご案内
２．「学生が勉強するようになるか」という観点で GPA 制度を考える/
（裏面）信大方式の GPA 制度（案）の概要（資料 No.1）
３．中教審答申の２大テーマと教員個人（資料 No.2-1）
４．中央教育審議会答申『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて〜生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ〜』抜粋
（資料 No.2-2）
５．信州大学学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）（資料 No.2-3）
６．信州大学の学生について（資料 No.3-1〜3-3）
７． e-Learning の効用と利用の仕方 －ICT 活用による教育の質保証を目指して－（資料 No.4-1）
８．初めての人のための eALPS（e-Learning システム）の活用（資料 No.4-2）
９．国立大学法人信州大学教員業績評価・給与査定制度（全学基準）抜粋
【平成 24 年度参考】（資料 No.5-1）
１０．ＦＤ参加証書サンプル （資料 No.5-2）
１１．ＦＤアンケ―ト用紙（※アンケートにご協力ください）
１２．高等教育研究センターNewsLetterNo.1〜18

高等教育研究センターのあらまし
FDのご案内

平成25年度新任教職員の皆様へ

信州大学 SHINSHU UNIVERSITY | 高等教育研究センター

高等教育研究センターのご案内

センター設置の理念と目的

信州大学の学内共同教育研究施設として、大学における体系的な教育課程の構築を支援するとともに、教育の質保証に係る戦略及び教学関連の施策実施のための手法に係る研究開発を行います。

本センターは、その前身を共通教育を担う教員組織である全学教育機構内の高等教育システム開発部に持ち、従来型の「大学教育センター」等の研究あるいは単なる教育改善支援組織とは異なり、より実践的な臨床研究に基づく高等教育の調査開発と教育の改革・改善およびその支援を行って来ました。その意味で、従来型の「高等教育研究」とは一線を画し、高等教育「実践」研究あるいは、高等教育「イノベーション」支援とも言うべき、会議室や机上から現場に飛び出した戦略的実践を伴う取組を目指しています。これにより、信州大学全体の「新たな」教育力の創生を効果的に支援して行けるものと期待しています。

センターの業務

高等教育研究センターは、2011年4月に設立されました。本センターは、1995年に設置された「教育システム研究開発センター」をそのルーツとし、高等教育システムセンター（2003年）、全学教育機構・高等教育システム開発部（2006年）を経て、今日の形態となりました。主要な業務は以下の通りです。

1．大学教育に関する研究及び教育手法の開発

高等教育の調査研究を通じて、本学の教育の効果的な実施に資することを目的としています。特色として、その前身が共通教育を担う教員組織である全学教育機構内の高等教育システム開発部であるため、単なる教育改善支援組織ではなく、より実践的な臨床研究に基づく高等教育の調査開発とその支援、会議室や机上から現場に飛び出した戦略的実践を伴う取組を目指しています。

2．大学教育の質保証に係る施策の企画

戦略的実践を伴う取組の一つとして、学内の教学関係組織と連携して、大学教育に求められている「教育の質」保証に向けた諸施策実施への基盤形成を担っています。基礎的な高等教育研究から、具体的な質保証の方策に関する実践研究まで多岐にわたる調査開発での貢献を目指しています。

3．教学関連の中期計画に進捗状況の把握及び計画実施の支援

法人の中期計画の内、教学関係の事項について、法人及び各部局で取組まれている計画の進捗状況の把握と、それに基づく計画の遂行に向けた諸施策実施と報告書等関連文書の作成についての支援をしています。また、中期計画に関わる学内外の情報収集、調査研究により、これらの業務への貢献を目指しています。

4．教学関連の大学情報戦略及び評価対応のデータ集積

大学教育に関わる学内外の情報を収集し、教学関連の施策の実施に向けたデータの蓄積と分析を、学内の教学関係組織と連携して行い、教学関係諸会議に報告しています。国内外の高等教育の最新情報とその分析、Institutional Research（IR）等の実施に向けた調査研究で、これらの業務への貢献を目指しています。

5．全学的なファカルティ・ディベロップメントの企画と各部局におけるFDの実施支援

大学教育の質の維持とその向上を目指すとともに、教職員一人ひとりのキャリアの充実を図るFaculty Development（FD）に向けて、学生のみならず教職員についても「楽しく自信を持って生きる賢い個人の形成」を目指す体系的なFDおよびSDプログラムの実施および実施支援を目指しています。

6．本学が加盟する高等教育コンソーシアム信州における教育活動の推進

大学間連携組織である高等教育コンソーシアム信州の運営およびそこでの教育、FD、学生支援等の活動への貢献を目指しています。さらに、大学間連携に関する国内外の動向調査、コンソーシアムで実施している遠隔教育に関する調査研究により、これらの業務への貢献を目指しています。

また，上記の他，本センターの目的を達成するために様々な業務を行っています。

FDのご案内

信州大学FD ポリシー

1. 信州大学は、教育組織としての向上を目指して、教育組織を単位とする授業担当者集団でのFDを重視します。
2. 信州大学は、教員個人としての向上を目指して、研修プログラムを組織的に支援します。

【解説】

- 教育組織単位とは、学部、学科、講座等の教育組織だけではなく、内容的にまとまりのある授業群の担当者集団を指します。
- 教員のキャリアパスを重視した研修プログラムを実施します。
- 個人業績評価との連動を前提に、日常的なFD 活動を研修プログラム化します。

平成２５年度FD実施計画と説明

新任教員の先生方には、新任教員研修（年度始め＝本日）と、FDカンファレンス（9月中旬・合宿形式）をご用意しております。万障お繰り合わせの上、ふるってご参加ください。

＊新任教員研修（4月2日（火））

信州大学の教育理念、大学で取り組んでいる課題、信州大学の学生の特徴など、教鞭をとっていただく上でまず必要な事柄をご紹介いたします。

＊FDカンファレンス（9月10日（火）～11日（水）（1泊2日））

信州大学の全ての学部から、新任教員と一般の教員とが40人ほど集まり、分科会形式で行う合宿研修です。先輩の教員や同じ新任の先生方と疑問や不安を共有しながら交流を深められ、新たなつながりができると好評を頂いています。

また、高等教育研究センターでは以下のメニューをご用意し、各学部や学科で必要な時にいつでもご利用いただけるようにしております。学部・学科単位ではなくとも、ご希望があれば、5人以上から対応させていただきますので、お気軽にお問い合わせください。

＊GPA関連…GPA制度導入に際してのポイントや課題
学習を促す評価構造（形成的評価やルーブリックなど）

＊教育方法関連…シラバスの書き方（シラバスは2月中旬～下旬に締切）
参加型授業の運営法や学生との接し方など

＊研究推進関連…科研費のとりかた（応募の学内締切は10月ごろ）など

▲平成24年度FDカンファレンスにおけるグループワークの様子

＊大学運営関連…教員業績書の書きかた（11月から12月に締切）
DPなど信州大学の教育方針の理解
大学の生産的な文化の育成
（男女共同参画・ワークライフバランス・人間関係の維持の方法）など

＊その他、学部や先生方のご要望に沿って、ご用意いたします。お気軽にお問い合わせください。

高等教育研究センターでは、全学を対象として、学生の認知構造やプロセスを知るための講演やワークショップを、昨年度に引き続き企画しています（国内・学内講師年4回）。日程が定まり次第、ホームページ上でお知らせいたします。ぜひご参加ください。

★FDに関するお問い合わせ★
加藤善子　katoy@shinshu-u.ac.jp 内線811-7236

教員の紹介

センター長挨拶　（センター長　小池健一）

2011年4月に発足した信州大学高等教育研究センターは、全学的なFDの企画と各部局におけるFDの実施支援を重要な業務のひとつとしています。FDはFaculty Developmentの略で、教員の職能開発と訳されています。信州大学もFDの定義を定めていますが（「信州大学のFDポリシー」をご参照ください）、センターではFDをより包括的に、広義にとらえなおし、すべての先生が信州大学で誇りを持って仕事をし、充実した毎日を送ることのできる大学文化・職場文化の育成に貢献することをより大きな目的として定めました。私たちが大学として直面している様々な課題に対し、私たち教職員のすべてが主体的に参加し、議論し、意思決定していくための支援をはじめ、学部や学科、またそれぞれの先生方の直面されている課題に個別に応じる支援も始めました。関係者全員が張り切っていますので、よろしくお願い申し上げます。

矢部 正之（副センター長/教授）

副センター長の矢部です。元々の専門は物理学（原子核理論）ですが、センターでは情報通信技術（ICT）を活用した教育の質保証を中心に、高等教育のイノベーションに向けた調査、研究開発をしています。この分野への関わりも長く、今年で創立15周年を迎えるコンピュータ利用教育関係の学会（CIEC）に、設立当初から関わってきました。この分野に興味のある方は、ぜひご一報を！

加藤 鉱三（教授）

信州大学を卒業・修了した学生が『楽しく自信を持って生きる賢い個人』として社会で活躍できる、そういう信州大学にするべく教職員と学生が心と力を合わせて進んでいく。もしそれが実現できたらそれはものすごいことです。そのビジョンを現実のものにするために、自分は何ができるんだろう、何をしなければならないだろう、ということから出発するというのが私自身の指導原理です。とは言いつつ、とりあえず山雅の目先の一勝がほしいです。

加藤 善子（准教授）

ご着任、おめでとうございます。信州大学の先生方は出身も経歴も個性も様々で、多くの先生方と知り合うことができるFDの仕事は、とても刺激的で幸せなものだと思っております。私は初年次教育や高等教育論を専門としています。これから色々な機会にお世話になると思いますが、どうぞよろしくお願いいたします。

★高等教育研究センターのウェブサイトをご活用ください★

高等教育研究センターの活動紹介、イベント情報はもちろん、学外の高等教育に関する情報や高等教育に関する用語解説、Q&Aのページもありますので、ぜひご覧ください。FDの開催報告や配布資料も随時掲載しています。

また、ウェブサイトでは、本センターで所蔵している高等教育に関する書籍を検索することができます。書籍は閲覧・貸出が可能ですので、利用を希望される場合はお問い合わせください。（http://www.shinshu-u.ac.jp/institution/rche/）

信州大学 SHINSHU UNIVERSITY | 高等教育研究センター

■〒390-8621　長野県松本市旭3-1-1
■TEL：0263-37-2194（担当：学務課教務グループ）
■MAIL：campus-rche_info@shinshu-u.ac.jp
■URL：http://www.shinshu-u.ac.jp/institution/rche/

「学生が勉強するようになるか」という観点で GPA 制度を考える

		国内標準	信大方式（案）	北米標準
GPA制度本体部分	**成績評定区分**	評定：S　A　B　C　F GP：4　3　2　1　0 C が合格水準 C が単位認定の下限 F は不合格 **北米に比べ１点低くなる**	評定：A　B　C　D　F GP：4　3　2　1　0 D は「不合格」で単位も認定されないが、1.0 の GP を与える C が単位認定の下限 F は不合格 「不受講」も F になる	評定：A　B　C　D　F GP：4　3　2　1　0 C が合格水準 D が単位認定の下限 F は不合格 「不受講」も F になる
	退学勧告の基準として GPA を	大多数の大学で未検討	（使う）	使っている
	卒業判定の基準として GPA を	大多数の大学で未検討	使わないが，卒業判定に準ずる形で使う	使っている
	GPA 不振学生の取り扱い	GPA 関係の書類で触れていない方がふつう	定期的な関門を設ける （例：　累積 GPA が 2.0 を下回った学生は「要指導」扱いとなり，２学期もしくは３学期連続で 2.0 を回復しないと退学となる。「要指導」となりそうな場合や，「要指導」となった時点でアドバイザーの助言を受けることが求められる。アドバイザーは特任教授で，リメディアルのコーディネーターも兼ねる。）	累積 GPA が 2.0 を下回った学生は「仮及第」扱いとなり，２学期もしくは３学期連続で 2.0 を回復しないと退学となるが，「仮及第」となりそうな場合や，「仮及第」となった時点でアドバイザーの助言を受けることが求められる。なお，アドバイザーは学部教員ではない専門職である。

GPA 導入のねらい	GPA 導入前と導入後で実質的に何も変わっていないので，GPA 導入によって**勉強するようになることは期待できない。**	①「不受講」がなくなること，②退学勧告があること，の２点から，**勉強するようになることが期待される。** 初年次教育で学修習慣をつけることにより，GPA の効果が高まる。 それに加え，各授業で適切に課題を出し，それをもとに成績を積み上げていくことがきわめて重要。	米国の大学生は勉強するとされているが，それは，**初年次教育，GPA，宿題が多く出される，の３点が効いている**と考えられる。

GPA制度の補助部分	受講登録後の履修撤回について	「不受講」をどう考えるかによる	「不受講」が「不可」になるため，最低限のものが必要。 （例： ・やむを得ない理由によるものは認める ・その他に，一学年に１科目まで認める）	ある
	「再履修」について	不合格となった科目を再び履修することは当然あるが，「合格」することが目的であって，成績を上書きすることが目的ではない。	・D を「不可」とするので，従来検討してきた（D で合格した科目を再び履修して C 以上をねらう，という意味での）「再履修」制度は必要なくなる。 ・再び履修して合格した場合，過去の不合格分を上書きする。	「合格」である C や D でも「再履修」により成績の上書きができる。
	成績説明請求について	何らかのものが必要		
	履修指導・学習相談体制の整備	何らかのものが必要。GPA の関門が高いほど，強力な体制が求められる。		
	教員に求められること：**宿題を出す**	学生に勉強させるためには適切な宿題を出し，それを成績に反映させることが必要		
	教員に求められること：**中間評価を出す**	小試験で成績を積み上げていったり，中間試験を実施するなど，最終試験の結果が出る以前でも，受講生が自分のその時点での成績を把握できるようにすることが，学生を勉強させる手段として有効		
	成績評価の分布の開示	GPA 制度が機能するためには，個々の授業で「厳格な成績評価」が行われていることが前提条件となる。このため，全ての授業科目の成績分布を教員と学生に開示する。		

信大方式の GPA 制度（案）の概要

【全学年共通事項】
・学期ごとに全員に面談を実施。（前学期の GPA を確認する）
・退学勧告に使う方針で，各学部で検討してもらう。例として，3 学期連続で学期 GPA=2.0（※要検討）（※累積 GPA ではない）を下回ったら退学勧告とする。
・GPA を入れることが，学生に勉強させるというメッセージになるようにするべき。（特に１年次）

【１年次】
・全学部が前期後期で GPA を算出し（後期は累積 GPA，2 月頃），進級判定に用いる。
※必修を落とした場合の進級の扱いは GPA では解決しないので，別途検討する。

【２年次以降】
・卒業判定には使わないが，同等の効果を持つ使い方を各学部で検討してもらう。（就職活動を３年次終わりから始めるので，その時点の成績を学生の質保証として使用できる。）
例えば：
●学年進行の学部
・国家試験，資格試験の受験資格等。
●学年進行でない学部
・卒論の執筆資格
・実習参加資格など
・４年次への進級判定実施
等

GPA 制度の補助部分の議論の方向性（案）

■『GPA 補助制度（素案）』について
学部に意見を聞いた時の文書『GPA 補助制度（素案）』は廃棄する。新たに補助部分に関する詳細は文書として作成する。そのための方向性を下に示す。

■受講登録後の履修撤回について
・受講登録後の履修撤回は，やむを得ない理由によるものは認める。
・やむを得ない理由によらないものについても，１年次生は学期に１科目，２年次以降の学生は１年間に１科目まで受講登録後の履修撤回を認める。

■再履修制度について
・「合格した科目をもう一度履修することを認める」という意味での「再履修制度」は想定しない。
・不合格である F または D を取った科目をもう一度履修して，それが合格になった場合，過去の不合格分の単位数を GPA の計算式の分母から削除する。

■「中間評価の通知の推奨」について
・制度化は考えない。
・小試験で成績を積み上げていったり，中間試験を実施するなど，最終試験の結果が出る以前でも，受講生が自分のその時点での持ち点を把握できるようにすることが，学生を勉強させる手段として有効であるとして推奨する。

■成績説明請求について
・『GPA 補助制度（素案）』では，教員と学生の間で直接やり取りさせない，という方向性を持たせていたが，それは撤回する。
・成績の説明は基本的には従来の通り，教員・学生間で直接行うこととするが，そうすることに支障がある場合のセーフガードとしての手続きという位置付けで考える。
・手続きの詳細は『GPA 補助制度（素案）』にあるものを議論の出発点とする。

■履修指導・学修相談体制の整備について
・北米の大学では，GPA 制度を支えるインフラとして専門・専任のアドバイザーが機能している。それを念頭において本学での履修指導・学修相談体制を考える。

中教審答申の2大テーマ
と
教員個人

高等教育研究センター
加藤鉱三

1

はじめに

『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて
～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～』(答申)

平成24年8月28日
中央教育審議会

2

はじめに

二つのメッセージ

成熟社会　→「知識を基盤とした自立、協働、創造モデル」

そのために**学生に勉強させる**

どうやって？

p.6　学校制度全体を、従来からの組織や形式の観点からではなく、①**プログラム 中心**・②具体的な**成果中心**の観点から見直す

①＋②＝卒業時の知識・能力**で大学が評価される**

「**学位授与の方針**」

3

テーマその1

学生に勉強させる

4

(5. 学士課程教育の現状と学修時間)

■学士課程教育の課題

①学修時間短い，②汎用的能力が弱い

①p.12先頭

一日当たりの総学修時間は8時間必要

実際には4.6時間　cf. アメリカの大学生

(p.13では，授業には出るが勉強はしない)

②p.12下

学生アンケートで，「論理的に文章を書く力」、「人に分かりやすく話す力」、「外国語の力」に否定的

5

(5. 学士課程教育の現状と学修時間)

■学修時間に着目する理由

1. (高校までの制度と違って)主体的学修が単位制度・学位制度の基盤だから

大学評価の視点：

③大学や教員の組織的な責任体制が

(学修時間)の確保に対応しているか

(←**勉強しないのは大学が悪い**)

2. 学修時間は指標として使いやすい
3. 国際的な信頼の指標になる

6

（5. 学士課程教育の現状と学修時間）

■減少する高校生の勉強時間

p.14　高校生についても学力における中間層の勉強時間が最近15年間で約半分に減少

7

（6. 学士課程教育の質的転換への方策）

■体系的・組織的な教育の実施

学生の学修時間の増加・確保には、学生の主体的な学修を促す教育内容と方法の工夫が不可欠である。

・教育課程の体系化

学位授与の方針を出口とする，構造化されたカリキュラム

・組織的な教育の実施

授業は学位授与の方針を分担するもの

・授業計画（シラバス）の充実

・全学的な教学マネジメントの確立

8

（7. 質的転換に向けた更なる課題）

■大学による改革努力と課題

各種意見聴取の結果，

・教育課程の体系化
・組織的な教育の実施
・授業計画（シラバス）の充実
・全学的な教学マネジメントの確立

が進んでいないというわけではない，ということが分かった。

「しかしながら、我が国の学生の学修時間は全体として短く、多くの国民は大学教育の現状を肯定的には捉えていない。」　**それはなぜ？**

9

（7. 質的転換に向けた更なる課題）

■「プログラムとしての学士課程教育」という概念の未定着

・教育課程の体系化
・組織的な教育の実施
・授業計画（シラバス）の充実
・全学的な教学マネジメントの確立

これらが理解されていないということ

10

（7. 質的転換に向けた更なる課題）

なぜ勉強しないのか？　その他の理由

■学修支援環境の整備についての課題

学生の学修を支える環境を更に整備する必要がある

■高等教育と初等中等教育の接続についての課題

特に高等学校教育と高等教育の接続や連携が必ずしも円滑とは言えない

■地域社会や企業など、社会と大学の接続についての課題

学修と就職活動の相克

11

学生に勉強させる

「アメリカの大学生は勉強する」とされている

当センターの考えるその理由；

答申が主張するところの

「プログラムとしての学士課程教育」がアメリカでは整備されているから

であるはずがない

※論理的につながらないじゃないですか

12

学生に勉強させる

「アメリカの大学生は勉強する」とされている

当センターの考えるその理由；

アメリカの大学では

1．GPAが人生を決める

低GPAでは卒業できない，就職できない

2．成績は信賞必罰

成績は運で決まるのではなく，自分のパフォーマンスだけが成績を決める

3．宿題がたくさん出るし，宿題をやっていかないと単位がもらえない

13

学生に勉強させる

どういう風に宿題を出す？

「各授業において，**それぞれの分野での方法論と約束事を練習し経験する課題を出し**，**評価とフィードバックを徹底する**ことにより，自主的学修の促進につなげることを狙う」

（「外部評価による課題事項への対応に関する計画書」より）

14

学生に勉強させる

評価とフィードバックを徹底する

↑

これが必要な理由

Q:「学生が勉強しないのはなぜですか？」

A:「（高校までと同じように大学でも）勉強しなくても何とかなることを知っているからです」（宿題出さなくても単位取れるし）

15

学生に勉強させる

1．宿題をたくさん出すことによって学生に勉強させる

2．出した宿題の評価とフィードバックを徹底する

現状：

文科省や中教審が大学にいろんな要求をしてくる

大学はその都度慌てる

しかし：

・この二つが（**特に2が**）できていれば（本格的なポートフォリオが現実的になるため）**何を言ってきても慌てる必要はなくなり**，信大のこの上ない**強み**となる

16

テーマその2

「学位授与の方針」で大学が評価される

17

「学位授与の方針」

p.6　学校制度全体を、従来からの組織や形式の観点からではなく、①**プログラム 中心**・②具体的な**成果中心**の観点から見直す

①＋②＝卒業時の知識・能力**で大学が評価される**

「**学位授与の方針**」

〇答申に沿った「学位プログラム」の解釈

①と②，つまり**卒業時の知識・能力から逆算してカリキュラムを作る**こと

18

「学位授与の方針」

卒業時の知識・能力から逆算してカリキュラムを作る

↓

これができるようになるために

こういう授業が

こういう順番で配置されている

学部教育ではすでにそうなっている

「逆算して作ってある」という見せ方の問題

19

「学位授与の方針」

p.6　学校制度全体を、従来からの組織や形式の観点からではなく、①**プログラム 中心**・②具体的な**成果中心**の観点から見直す

①＋②＝卒業時の知識・能力**で大学が評価される**

「**学位授与の方針**」

×答申に沿っていない「学位プログラム」の解釈

とにかく他学部の教員が教える

学部間で重複する授業を廃する

20

（8. 今後の具体的な改革方策）

① 速やかに取り組むことが求められる事項

■大学

p.20　（ア）の１点め

・学位授与の方針の下で、学生に求められる能力をプログラムとしての学士課程教育を通じていかに育成するかを明示する

（＝DPを出口とするカリキュラムにする）

21

（8. 今後の具体的な改革方策）

■大学

p.20　（ア）の２点め

・プログラムの中で個々の授業科目が能力育成のどの部分を担うかの認識を担当教員間の議論を通じて共有し、他の授業科目と連携し関連し合いながら組織的な教育を展開すること

（＝個々の授業が学位授与の方針を分担する）

22

（8. 今後の具体的な改革方策）

■大学

p.20　（ア）の３点め

・プログラム共通の考え方や尺度（アセスメント・ポリシー）に則った成果の評価、その結果を踏まえたプログラムの改善・進化という一連の改革サイクルが機能する全学的な教学マネジメントの確立を図る。

（＝カリキュラムの成果をどう評価するか，を決めておく）（＝**DPをどう測定するか**を決めておく）

23

「学位授与の方針」

一般の教員にとって

これら3枚のスライドは，実は

1．言っていることを理解するのにとても時間がかかるし，

2．理解したとしても共感するのは更に難しいのでは？

それはなぜ？

24

「学位授与の方針」

用語が難しいから？

それもある

当センターの見解は

・答申が語りかけているのは大学中枢であって一般教員ではない

・だから，一般教員にとっては，**答申の言葉は他人事**（ということではないだろうか？）

25

「学位授与の方針」

よくある図式

・中枢が政策を決定するが

・現場にそれに対する**共感**がないため，形だけで終わる

文科省　vs.　各大学

各大学の中枢　vs.　現場の教員個人

26

「学位授与の方針」

「よくある図式」を避けるためには，

個人に語りかけ，

個人の**共感**を呼び起こさなければならない

しかし，どうやって？

27

「学位授与の方針」

先ほどの3枚のスライドを，**教員と学生個人の喜びをベースにして**大学が言い直す

3枚のスライドは要するに

「卒業時の知識・能力『学位授与の方針』で大学が評価される」

⇒「学位授与の方針」の知識・能力を学生が身に付けて卒業する

28

「学位授与の方針」

【課題】

個人の幸せをベースに，『学位授与の方針』を学生が身に付けて卒業していくための仕組み作り

【やり方の一例】

・個々の授業は学位授与の方針の部分部分を分担する

↓

29

「学位授与の方針」

分担した部分を学生が身に付けるよう教育する

どうやって？

例：　分担した部分を，その授業の趣旨で言えば「**これこれができるようになることだ」と規定し直し**，それができるようになったことを学生が**実感できるような課題**を設定する

30

「学位授与の方針」

DP【人類知の継承と未来創造マインド】を分担

規定し直した目標：「△△の発達について家族に説明できるようになる。」

↓

課題：　何を誰にどう話したか，反応はどうだったか，というレポートを提出させる

31

「学位授与の方針」

DP【普遍的・数量的理解力】を分担

規定し直した目標：「日常生活の中で，授業で扱う尺度や指標で測ることができるものと測ることができないものとの区別をつけることができる」

↓

試験：　授業で扱う尺度や指標で測ることができないものについて，測れない理由を問う

32

「学位授与の方針」

「これができるようになった」の一つ一つは小さな小さな目標

学生は（小さな）目標をこなすことで，自信と満足感を得る　＝　**学生の幸せ**

学生が（小さな）目標を達成することで，教員は教師として自己実現する　＝　**教員の幸せ**

33

「学位授与の方針」

『学位授与の方針』で言う知識・能力を身に付ける　　↑

一つ一つの「**これができるようになった**」の積み重ね

それを記録していくツールが**ポートフォリオ**

⇒　学生一人一人のポートフォリオがテーマ2「『学位授与の方針』で大学が評価される」のエビデンスに

34

テーマその1とテーマその2の

融合

35

二つのテーマの融合

『学位授与の方針』で言う知識・能力を身に付ける　　↑

一つ一つの「**これができるようになった**」の積み重ね

どう積み重ねていく？

1．教員が，分担する『学位授与の方針』を自分の授業内容に合わせて規定し直す

36

二つのテーマの融合

2. 規定し直した「これができるようになる」を受講生が実感できるように授業をデザインし，

3. 実際に「これができるようになる」ための課題を出し，

4. その**評価とフィードバックを徹底**する

↓

37

二つのテーマの融合

↓

テーマ1「学生に勉強させる」

テーマ1とテーマ2が**ここで融合**

「勉強させる」ための課題は「これができるようになる」こと

「これができるようになる」は学生個人と**教員個人の喜び**

38

二つのテーマの融合

個人の**共感**がない政策は成功しない

高等教育研究センターは，**個人の喜び**を本気で追及していきます

センターをよろしくお願いいたします

39

ご清聴

有難うございました

40

①　速やかに取り組むことが求められる事項

（大学）

大学においては、各大学の状況を踏まえ、例えば、以下のような取組を行い、学士課程教育の質的転換を図ることが求められる。

（ア）　学長を中心として、副学長・学長補佐、学部長及び専門的な支援スタッフ等がチームを構成し、当該大学の学位授与の方針の下で、学生に求められる能力をプログラムとしての学士課程教育を通じていかに育成するかを明示すること、プログラムの中で個々の授業科目が能力育成のどの部分を担うかの認識を担当教員間の議論を通じて共有し、他の授業科目と連携し関連し合いながら組織的な教育を展開すること、プログラム共通の考え方や尺度（アセスメント・ポリシー）に則（のっと）った成果の評価、その結果を踏まえたプログラムの改善・進化という一連の改革サイクルが機能する全学的な教学マネジメントの確立を図る。

学長を中心とするチームは、学位授与の方針、教育課程の編成・実施の方針(※)、学修の成果に係る評価等の基準について、改革サイクルの確立という観点から相互に関連付けた情報発信に努める。特に、成果の評価に当たっては、学修時間の把握といった学修行動調査やアセスメント・テスト（学修到達度調査）(※)、ルーブリック(※)、学修ポートフォリオ等、どのような具体的な測定手法を用いたかを併せて明確にする。

教育プログラムの策定においては、ＣＡＰ制(※)やナンバリング等を実際に機能させながら、教員が個々の授業科目の充実にエネルギーを投入することを可能とするように授業科目の整理・統合と連携を図る。また、学位授与の方針に基づく組織的な教育への参画、貢献についての教員評価を行い、教員の教育力の向上・改善や処遇の決定、顕彰等に活用する。

学部長の選任に当たっては、学長のリーダーシップの下で教学マネジメントを担い、大学教育の改革サイクルの確立を図るチームの構成員としての適任性という観点も重視する。

（イ）　全学的な改革サイクルの確立のため、ワークショップを中心に「プログラムとしての学士課程教育」という基本的な認識の共有や教育方法に関する技術の向上に資する充実したＦＤを実施する。そのために、専門家（ファカルティ・ディベロッパー）の養成や確保、活用を図る。

（ウ）　学部等の縦割りの構造を超えて学士課程教育をプログラムとして機能させるためには、教員だけではなく、職員等の専門スタッフの育成と教育課程の形成・編成への組織的参画が必要であり、例えば、他大学との事務の共同実施等で

平成25年度新任教員FD研修
(H25.4.2)　資料No.2-3

学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

ホームに戻る　このページを印刷する

学部

- 学士課程共通　信州大学学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）
- 各学部のディプロマ・ポリシー

大学院

- 大学院共通　信州大学学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）
- 各研究科のディプロマ・ポリシー

信州大学学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

信州大学は、豊かな自然環境と、伝統ある歴史と文化に恵まれた信州に立地する大学です。本学では、かけがえのない自然や文化を愛する気持ちをもって、人類文化・思想の多様性を受け入れ、豊かなコミュニケーション能力を持つ教養人であるとともに、高度な専門知識と能力を備えて自ら課題を発見し、その解決にむけて挑戦する心をもった個性的な人材を育てることを理念・目標に掲げています。本学は、この理念・目標を踏まえて、以下に示す資質、知識や能力を、共通教育（教養教育、基礎教育）、専門教育及び課外活動を含む大学内外での幅広い教育活動を通じて培うこととし、ここに本学の学士課程に共通する学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）を定めます。

豊かな人間性

- みずからを他者や社会との関わりのなかで捉え、自己啓発に努めることができる【自己認識・自己啓発マインド】
- 理想や倫理観をもって社会の平和的・持続的発展のために行動できる【社会的行動マインド】

人類知の継承

- 人類の知を継承し、それらの成果の上に立って未来について創造的に考えられる【人類知の継承と未来創造マインド】
- 世界の多様な文化、思想、歴史、芸術に関する幅広い素養がある【多様な文化受容マインド】
- 科学諸分野の歴史やその成果に関して幅広く理解できる【科学リテラシー】

社会人としての基礎力

- 日本語および外国語を用い、的確に読み、書き、聞き、他者に伝えることができる【言語能力】
- 対話を通じて他者と協力し、目標実現のために方向性を示すことができる【コミュニケーション能力、チームワーク力、リーダーシップ】
- 多様な情報を適切に取捨選択し、分析・活用できる【情報活用力】
- みずから問題を見出し、すじみちを立てて解決できる【問題発見・解決能力】

科学的・学問的思考

- 自然や社会の現象を普遍的な尺度や数量的指標を用いて理解できる【普遍的・数量的理解力】
- 専門学問分野における知識・技能を備え、それらを応用できる【専門知識と応用力】
- 専門以外の他分野に関する体系的な知識や素養がある【専門外の知識】

環境マインド

- 信州の自然・文化的環境への興味と関心をみずから深めることができる【地域環境に関する理解】
- 自然および人類社会が直面している環境問題を理解することができる【環境基礎力】
- 地球環境と人類文化との調和・共生のため、積極的に行動することができる【環境実践力】

信州大学の学生について

平成25年度 新任教員研修
4/2/2013
高等教育研究センター

このセクションの目的

- 「いまどきの学生」の紹介
- 信州大学の学生の紹介

学生の同時代史

	1年生	4年生	
1991(H3)		0才	湾岸戦争ぼっ発
1992(H4)		1才	ボスニア・ヘルツェゴビナ紛争
1993(H5)		2才	55年体制終焉、細川内閣発足
1994(H6)	0才	3才	ルワンダ虐殺、羽田内閣発足 松本サリン事件、村山内閣発足
1995(H7)	1才	4才	阪神淡路大震災、 地下鉄サリン事件

学生の同時代史

	1年生	4年生	
1996(H8)	2才	5才	橋本内閣発足、
1997(H9)	3才	6才	神戸児童連続殺人事件
1998(H10)	4才	7才	和歌山カレー事件、小渕内閣発足、テポドン発射
1999(H11)	5才	8才	コソボ紛争、初の脳死臓器移植手術、茨城原発臨界事故
2000(H12)	6才	9才	グリコ森永事件時効成立、介護保険制度開始、森内閣発足
2001(H13)	7才	10才	ブッシュ米大統領就任、米同時多発テロ事件

学生の同時代史

	1年生	4年生	
2001(H13)	7才	10才	小泉内閣発足、付属池田小学校事件
2002(H14)	8才	11才	EU通貨ユーロ統合、東ティモール独立、学習指導要領改正（ゆとり教育へ）
2003(H15)	9才	12才	イラク戦争開始、日経平均株価最安値記録、フセイン大統領拘束、SARS流行
2004(H16)	10才	13才	新札発行、年金未納問題

学生の同時代史

	1年生	4年生	
2005(H17)	11才	14才	JR福知山線脱線事故、郵政解散、ハリケーン・カトリーナ
2006(H18)	12才	15才	ライブドアショック、村上ファンド事件、安部内閣発足、北朝鮮テポドン発射、地下核実験
2007(H19)	13才	16才	不二家賞味期限偽装事件、福田内閣発足、団塊世代の大量定年退職始まる

学生の同時代史

	1年生	4年生	
2008(H20)	14才	17才	中国製冷凍餃子中毒事件、 秋葉原通り魔事件、 リーマンショック、麻生内閣発足
2009(H21)	15才	18才	オバマ米大統領就任、 裁判員制度開始、 鳩山内閣発足
2010(H22)	16才	19才	ギリシャ財政危機、 管内閣発足、
2011(H23)	17才	20才	鳥インフルエンザ流行、 アラブの春、東日本大震災、 野田内閣発足

学生の同時代史

	1年生	4年生	
2011(H23)	17才	20才	鳥インフルエンザ流行、 アラブの春、東日本大震災、 野田内閣発足
2012(H24)	18才	21才	オウム平田信・菊地直子・高橋克也 容疑者逮捕、金冠日食、 北朝鮮ミサイル発射、尖閣領土問題、 第三次野田政権発足、衆院選自民圧勝、第二次安部政権発足

現代の若者世代

- GDP世界2位の国で育つ
- きょうだい数は1人か2人が8割を占める
- パソコンや携帯電話、インターネットがあたりまえにある
- 物心ついたころには不況が始まっており、それ以降景気が低迷している
- 終身雇用は期待できない
- 東西冷戦は生まれる前に終わっていた
- 大規模災害やテロが身近で起こる

大学と大学生の変遷

- 1950-1960年代：学生運動・大学紛争の時代
- 1970-1980年代：大学の「レジャーランド化」
  モラトリアムとしての大学
- 1990年代：就職氷河期：資格志向・実学志向
  「学力低下」論争
- 2000年代：大学教育改革の中の学生
  高校の延長としての大学
  大学生の「まじめ化」「生徒化」

感想や質問？

新入生調査

2011年7月実施の一年生調査（全学・1706名）

- 大学第一世代：32%　第二世代：65%
- 現役生：79%　浪人生（1年）：16%　その他：5%
- 他の高等教育機関を経由：4.5%
- 信州大学が第一志望：55%
  第二志望以下：45%（不本意入学）

新入生調査

- 一般入試で入学：75%　公募推薦：19%
- センター試験後に受験を決定：35%
- 「合格しそうだった」から受験した：73%
- 「学ぶ内容に興味があった」から受験した：64%
- 願書を信大にのみ出した：37%
- 大学院（修士以上）まで進学したい：40%

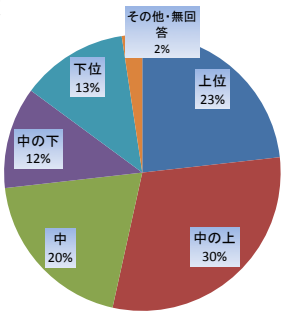
新入生調査

- アパートや寮などに居住：85%
  実家や親せきの家に居住：11%
- 学費の支払いに少し不安：47%
  とても不安：18%

新入生調査

- 高校時代の成績

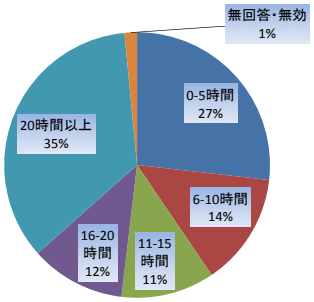
学力と同時に
学習習慣の
代替指標として
解釈可能。



新入生調査

- 勉強時間（高3時・一週間あたり）

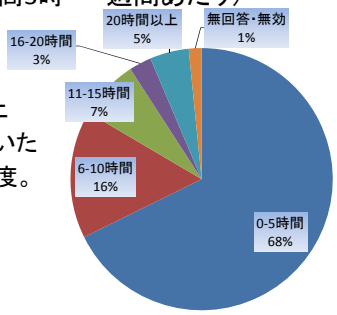
1日に1時間も勉強しなかった学生が1/4以上！



新入生調査

- テレビ観賞（高3時・一週間あたり）

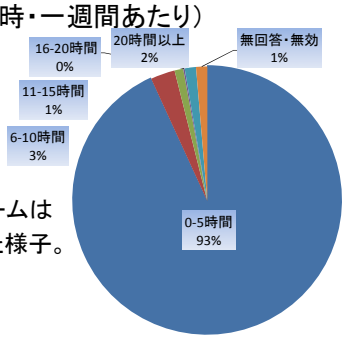
1日2時間以上テレビを見ていた学生は1/4程度。



新入生調査

- ゲーム（高3時・一週間あたり）

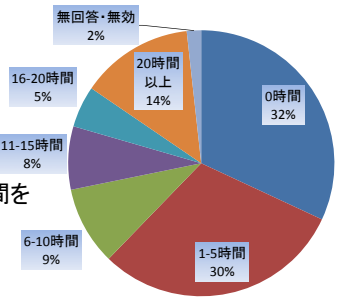
さすがにゲームは我慢していた様子。



新入生調査

- 部活動や同好会（高3時・一週間あたり）

帰宅部は
少数派。
部活に
かなりの時間を
使っていた。



新入生調査

- 信大生が自信のあること
（同年代に比べて平均以上だと思う割合）
競争心：36%　協調性：36%
やる気：34%　粘り強さ：37%
身体の健康：45%　チャレンジ精神：34%

- 信大生が自信のないこと
（同年代に比べて平均以下だと思う割合）
芸術的な能力：49%　コンピュータの操作能力：46%
リーダーシップ：39%　社交面での自信：35%
外国語の能力：46%

新入生調査

- キャリアに求める価値
（「とても重要」「少し重要」と答えた割合）
  - 社会を変えるための仕事：52%
  - 高収入の可能性：76%
  - 世間的な知名度や地位：51%
  - 創造性や独創性：59%
  - 自己を表現する仕事：60%
  - 自由な時間：83%
  - リーダーシップを発揮できる：39%

新入生調査

- 共通教育・教養教育に満足：33%
- 専門科目に満足：30%
- 他の学生と話をする機会に満足：30%

- 自分の大学生活は充実している：85%
- もう一度選び直せるとしても信州大学に入学する：43%

新入生調査のまとめ

- 学習習慣が身についていない学生が少なからぬ割合で存在する
- 「合格しそうかどうか」が志望を決める大きな基準になっており、大学そのものへの愛着はこれから
- 大学生活全般に対する満足度は高い
- 現在の自己評価は必ずしも高くないが、進路に関するアスピレーションは高い

感想や質問？

学習時間調査

- 2012年7月実施の学習時間アンケート
  （全学部の1年生・1941名）

- 女性688人（35.45%）　男性1253人（64.55%）

- 人文学部 155人（ 8.0%）　教育学部 270人（13.9%）
- 経済学部 183人（ 9.4%）　理学部　187人（ 9.6%）
- 医学部　247人（12.7%）　工学部　470人（24.1%）
- 農学部　174人（ 8.9%）　繊維学部 261人（13.4%）

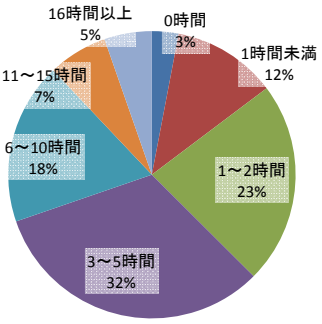
授業時間以外の学習場所

1. 自宅や寮の自室　1751（89.9%）
2. 図書館　907（46.6%）
3. 生協の食堂やパンショップ　407（20.9%）
4. 各学部のラウンジ　141（ 7.2%）
5. 全学教育機構の空き教室やコンピューター室　65（ 3.3%）
6. キャンパス内のその他の場所　73（ 3.7%）
7. キャンパス外の場所（自宅や寮を除く）　156（ 8.0%）

無回答　4（ 0.2%）

（複数回答）

授業時間以外の学習時間（1週間あたり）



授業時間以外の学習時間
（1週間あたり）

- 学部によって学習時間に差はない
- 入試形態による差もない
- 宿題の出される科目数にも影響されない
  - 宿題が出されても、学習しない学生は一定数存在する
- 一カ月当たりの読書量と学習時間には正の関連がある。本を1冊も読まない学生が、最も学習しないグループである。
- 男女差が大きい

感想や質問？

ありがとうございました！

- 各種学生調査等へのご協力をお願いする際には、ご協力ください。よろしくお願いいたします。
- 各学部別の分析も、ご希望があればお手伝いいたします。お声かけください。

ご質問・ご要望はこちらまで：katoy@shinshu-u.ac.jp

参考文献

- 伊藤茂樹（1993）「学生イメージの虚実―大学生調査から」『IDE-現代の高等教育』No.344
- 武内清編（2003）『キャンパスライフの今』玉川大学出版会
- 溝上真一（2004）『現代大学生論』NHKブックス

平成25年度新任教員FD研修
(H25.4.2)　資料No.3-2

学 習 時 間 に 関 す る ア ン ケ ー ト

このアンケートは、学生のみなさんの学習行動を把握することで、信州大学の教育課程と教育の内容をより良くするために行うものです。みなさんの回答は統計的に処理されますので、プライバシーが他の人に知られる心配は全くありません。実際に行っていることを、正直にそのままお答えください。回答する際には、回答用紙の該当する番号を黒鉛筆または黒ボールペンで塗りつぶしてください。ただし、設問Ⅷは数字で答えてください。

Ⅰ．あなたの性別を教えてください。

１．女　688 人（35.45%）　　２．男　1253 人（64.55%）

Ⅱ．あなたの学部・学科等を教えてください。コードの十の位と一の位をそれぞれマークしてください。

学部	コード	学科・課程・系	コード	学科・課程・系
人文学部	１１	人間情報学科	１２	文化コミュニケーション学科

155 人（全体の 8.0%）

教育学部	２１	学校教育教員養成課程	２２	特別支援学校教員養成課程
	２３	生涯スポーツ課程	２４	教育カウンセリング課程

270 人（全体の 13.9%）

経済学部	３１	経済学科	３２	経済システム法学科

183 人（全体の 9.4%）

理学部	４１	数理・自然情報科学科	４２	物理科学科
	４３	化学科	４４	地質科学科
	４５	生物科学科	４６	物質循環学科

187 人（全体の 9.6%）

医学部	５１	医学科	５２	保健学科

247 人（全体の 12.7%）

工学部	６１	機械システム工学科	６２	電気電子工学科
	６３	土木工学科	６４	建築学科
	６５	物質工学科	６６	情報工学科
	６７	環境機能工学科		

470 人（全体の 24.1%）

農学部	７１	食料生産科学科	７２	森林科学科
	７３	応用生命科学科		

174 人（全体の 8.9%）

繊維学部	８１	繊維・感性工学系	８２	機械・ロボット学系
	８３	化学・材料系	８４	応用生物科学系

261 人（13.4%）

Ⅲ．信州大学に合格した際にあなたが受けた試験の選抜方法を一つ選んでください。

１．一般選抜前期日程	1118（57.4%）	６．特別選抜中国引揚	0（0.0%）
２．一般選抜後期課程	381（19.6%）	７．特別選抜社会人	3（0.2%）
３．AO 選抜	20（1.03%）	８．特別選抜私費留学生	32（1.6%）
４．特別選抜推薦	387（19.9%）	９．特別選抜政府派遣	0（0.0%）
５．特別選抜帰国子女	3 （0.2%）	１０．特別選抜日韓理工系	0（0.0%）
		無回答	3（0.2%）

Ⅳ．あなたは現在、授業時間以外にどこで学習をしていますか。あてはまるものをすべて選んでください。

１．自宅や寮の自室	1751（89.9%）
２．図書館	907（46.6%）
３．生協の食堂やパンショップ	407（20.9%）
４．各学部のラウンジ	141（ 7.2%）
５．全学教育機構の空き教室やコンピューター室	65（ 3.3%）
６．キャンパス内のその他の場所	73（ 3.7%）
７．キャンパス外の場所（自宅や寮を除く）	156（ 8.0%）
無回答	4（ 0.2%）

Ⅴ．授業時間を除いて、あなたは現在、自学自習（予復習を含む）にどの程度の時間を使っていますか。一週間あたりの授業時間外の学習時間について、あてはまるものを 1 つ選んでください。

１．０時間	58 （3.0%）	２．１時間未満	228（11.7%）
３．１～２時間	442（22.7%）	４．３～５時間	627（32.2%）
５．６～１０時間	354（18.2%）	６．１１～１５時間	130 （6.7%）
７．１６～２０時間	52（ 2.7%）	８．２０時間以上	52 （2.7%）
		無回答	4（ 0.21%）

Ⅵ．あなたが履修している授業のうち、予復習などの宿題がほぼ毎週出される科目は、いくつありますか。

１．１科目	226（11.6%）	２．２科目	564（29.0%）
３．３科目	551（28.3%）	４．４科目	320（16.4%）
５．５科目以上	209（10.7%）	６．ない	69 （3.5%）
		無効・無回答	8（ 0.4%）

Ⅶ．あなたは、一か月あたり平均何冊本を読みますか（マンガや雑誌は除く）。

１．０冊	736（37.8%）	２．１冊	518（26.6%）
３．２～４冊	514（26.4%）	４．５～７冊	104 （5.3%）
５．８～１０冊	35 （1.8%）	６．１１冊以上	35 （1.8%）
		無回答	5 （0.3%）

Ⅷ．あなたは現在、週にいくつの科目を履修していますか。科目数を数字で答えて下さい。

ご協力ありがとうございました。

クロス集計結果からまとめられること

＊学部や選抜方法によって学習時間に差がみられることはない。どの学部でも、どの選抜方法でも、0 時間~20 時間以上まで、ばらつきがある。1~2 時間が 20~25%程度、3~5 時間が 30~35%、6~10 時間が 15~20%ほど。

＊読書数と時間外学習時間は相関がある。一か月に全く本を読まないグループが、最も学習しないグループである。また、11 冊以上になると、学習時間が下がる傾向が見られる。

＊性別は学習時間に強く効いている。授業時間外で学習しないのは圧倒的に男子である。底辺層が厚いのが男子。

&[ページ タイトル]

学部 と V.授業時間外の学習時間 のクロス表

			V.授業時間外の学習時間									合計
			0時間	1時間未満	1~2時間	3~5時間	6~10時間	11~15時間	16~20時間	20時間以上	99	
学部	人文	度数	5	20	34	59	20	9	5	3	0	155
		学部 の %	3.2%	12.9%	21.9%	38.1%	12.9%	5.8%	3.2%	1.9%	.0%	100.0%
	教育	度数	2	26	68	98	55	15	4	2	0	270
		学部 の %	.7%	9.6%	25.2%	36.3%	20.4%	5.6%	1.5%	.7%	.0%	100.0%
	経済	度数	6	18	41	56	45	16	1	0	0	183
		学部 の %	3.3%	9.8%	22.4%	30.6%	24.6%	8.7%	.5%	.0%	.0%	100.0%
	理	度数	7	18	43	47	33	21	8	8	2	187
		学部 の %	3.7%	9.6%	23.0%	25.1%	17.6%	11.2%	4.3%	4.3%	1.1%	100.0%
	医	度数	8	30	38	67	41	18	18	26	1	247
		学部 の %	3.2%	12.1%	15.4%	27.1%	16.6%	7.3%	7.3%	10.5%	.4%	100.0%
	工	度数	16	65	122	158	77	21	5	5	1	470
		学部 の %	3.4%	13.8%	26.0%	33.6%	16.4%	4.5%	1.1%	1.1%	.2%	100.0%
	農	度数	5	22	36	53	35	14	6	3	0	174
		学部 の %	2.9%	12.6%	20.7%	30.5%	20.1%	8.0%	3.4%	1.7%	.0%	100.0%
	繊維	度数	9	29	60	89	48	16	5	5	0	261
		学部 の %	3.4%	11.1%	23.0%	34.1%	18.4%	6.1%	1.9%	1.9%	.0%	100.0%
合計		度数	58	228	442	627	354	130	52	52	4	1947
		学部 の %	3.0%	11.7%	22.7%	32.2%	18.2%	6.7%	2.7%	2.7%	.2%	100.0%

III.信州大学を受験した試験の選抜方法 と V.授業時間外の学習時間 のクロス表

			V.授業時間外の学習時間							V.授業時間外の学習時間		合計
			0時間	1時間未満	1~2時間	3~5時間	6~10時間	11~15時間	16~20時間	20時間以上	99	
III.信州大学を受験した試験の選抜方法	前期	度数	37	154	241	358	195	67	30	34	2	1118
		III.信州大学を受験した試験の選抜方法 の %	3.3%	13.8%	21.6%	32.0%	17.4%	6.0%	2.7%	3.0%	.2%	100.0%
	後期	度数	11	35	95	125	62	34	8	9	2	381
		III.信州大学を受験した試験の選抜方法 の %	2.9%	9.2%	24.9%	32.8%	16.3%	8.9%	2.1%	2.4%	.5%	100.0%
	AO	度数	1	0	7	6	3	1	1	1	0	20
		III.信州大学を受験した試験の選抜方法 の %	5.0%	.0%	35.0%	30.0%	15.0%	5.0%	5.0%	5.0%	.0%	100.0%
	推薦	度数	9	37	89	132	81	24	9	6	0	387
		III.信州大学を受験した試験の選抜方法 の %	2.3%	9.6%	23.0%	34.1%	20.9%	6.2%	2.3%	1.6%	.0%	100.0%
	帰国子女	度数	0	1	2	0	0	0	0	0	0	3
		III.信州大学を受験した試験の選抜方法 の %	.0%	33.3%	66.7%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	100.0%
	社会人	度数	0	0	1	0	2	0	0	0	0	3
		III.信州大学を受験した試験の選抜方法 の %	.0%	.0%	33.3%	.0%	66.7%	.0%	.0%	.0%	.0%	100.0%
	私費留学	度数	0	1	6	5	10	4	4	2	0	32
		III.信州大学を受験した試験の選抜方法 の %	.0%	3.1%	18.8%	15.6%	31.3%	12.5%	12.5%	6.3%	.0%	100.0%
	無回答	度数	0	0	1	1	1	0	0	0	0	3
		III.信州大学を受験した試験の選抜方法 の %	.0%	.0%	33.3%	33.3%	33.3%	.0%	.0%	.0%	.0%	100.0%
合計		度数	58	228	442	627	354	130	52	52	4	1947
		III.信州大学を受験した試験の選抜方法 の %	3.0%	11.7%	22.7%	32.2%	18.2%	6.7%	2.7%	2.7%	.2%	100.0%

VI.予復習などの宿題が出される科目 と V.授業時間外の学習時間 のクロス表

			V.授業時間外の学習時間							V.授業時間外の学習時間		合計
			0時間	1時間未満	1~2時間	3~5時間	6~10時間	11~15時間	16~20時間	20時間以上	99	
VI.予復習などの宿題が出される科目	1科目	度数	6	44	63	53	41	8	4	6	1	226
		VI.予復習などの宿題が出される科目 の %	2.7%	19.5%	27.9%	23.5%	18.1%	3.5%	1.8%	2.7%	.4%	100.0%
	2科目	度数	14	98	152	186	61	27	11	14	1	564
		VI.予復習などの宿題が出される科目 の %	2.5%	17.4%	27.0%	33.0%	10.8%	4.8%	2.0%	2.5%	.2%	100.0%
	3科目	度数	16	42	130	204	100	36	11	12	0	551
		VI.予復習などの宿題が出される科目 の %	2.9%	7.6%	23.6%	37.0%	18.1%	6.5%	2.0%	2.2%	.0%	100.0%
	4科目	度数	6	23	49	104	91	26	14	7	0	320
		VI.予復習などの宿題が出される科目 の %	1.9%	7.2%	15.3%	32.5%	28.4%	8.1%	4.4%	2.2%	.0%	100.0%
	5科目以上	度数	7	14	36	60	50	25	9	7	1	209
		VI.予復習などの宿題が出される科目 の %	3.3%	6.7%	17.2%	28.7%	23.9%	12.0%	4.3%	3.3%	.5%	100.0%
	なし	度数	9	6	10	19	9	8	3	5	0	69
		VI.予復習などの宿題が出される科目 の %	13.0%	8.7%	14.5%	27.5%	13.0%	11.6%	4.3%	7.2%	.0%	100.0%
	9	度数	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
		VI.予復習などの宿題が出される科目 の %	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	100.0%	.0%	100.0%
	99	度数	0	1	2	1	2	0	0	0	1	
		VI.予復習などの宿題が出される科目 の %	.0%	14.3%	28.6%	14.3%	28.6%	.0%	.0%	.0%	14.3%	100.0%
合計		度数	58	228	442	627	354	130	52	52	4	1947
		VI.予復習などの宿題が出される科目 の %	3.0%	11.7%	22.7%	32.2%	18.2%	6.7%	2.7%	2.7%	.2%	100.0%

VII.一か月に読む本の冊数 と V.授業時間外の学習時間 のクロス表

			V.授業時間外の学習時間							V.授業時間外の学習時間		合計
			0時間	1時間未満	1~2時間	3~5時間	6~10時間	11~15時間	16~20時間	20時間以上	99	
VII.一か月に読む本の冊数	0冊	度数	40	97	189	229	113	29	16	21	2	736
		VII.一か月に読む本の冊数の %	5.4%	13.2%	25.7%	31.1%	15.4%	3.9%	2.2%	2.9%	.3%	100.0%
	1冊	度数	8	61	121	176	97	35	12	8	0	518
		VII.一か月に読む本の冊数の %	1.5%	11.8%	23.4%	34.0%	18.7%	6.8%	2.3%	1.5%	.0%	100.0%
	2~4冊	度数	7	56	103	173	100	47	17	10	1	514
		VII.一か月に読む本の冊数の %	1.4%	10.9%	20.0%	33.7%	19.5%	9.1%	3.3%	1.9%	.2%	100.0%
	5~7冊	度数	2	10	18	30	24	12	6	2	0	104
		VII.一か月に読む本の冊数の %	1.9%	9.6%	17.3%	28.8%	23.1%	11.5%	5.8%	1.9%	.0%	100.0%
	8~10冊	度数	0	2	1	10	12	5	0	5	0	35
		VII.一か月に読む本の冊数の %	.0%	5.7%	2.9%	28.6%	34.3%	14.3%	.0%	14.3%	.0%	100.0%
	11冊以上	度数	1	2	9	8	6	2	1	6	0	35
		VII.一か月に読む本の冊数の %	2.9%	5.7%	25.7%	22.9%	17.1%	5.7%	2.9%	17.1%	.0%	100.0%
	99	度数	0	0	1	1	2	0	0	0	1	5
		VII.一か月に読む本の冊数の %	.0%	.0%	20.0%	20.0%	40.0%	.0%	.0%	.0%	20.0%	100.0%
合計		度数	58	228	442	627	354	130	52	52	4	1947
		VII.一か月に読む本の冊数の %	3.0%	11.7%	22.7%	32.2%	18.2%	6.7%	2.7%	2.7%	.2%	100.0%

性別 と V.授業時間外の学習時間 のクロス表

			V.授業時間外の学習時間									合計
			0時間	1時間未満	1~2時間	3~5時間	6~10時間	11~15時間	16~20時間	20時間以上	99	
性別	女	度数	8	44	132	242	150	57	32	24	2	691
		性別 の %	1.2%	6.4%	19.1%	35.0%	21.7%	8.2%	4.6%	3.5%	.3%	100.0%
	男	度数	50	184	310	385	204	73	20	28	2	1256
		性別 の %	4.0%	14.6%	24.7%	30.7%	16.2%	5.8%	1.6%	2.2%	.2%	100.0%
合計		度数	58	228	442	627	354	130	52	52	4	1947
		性別 の %	3.0%	11.7%	22.7%	32.2%	18.2%	6.7%	2.7%	2.7%	.2%	100.0%

平成25年度新任教員FD研修
(H25.4.2)　資料No.4-1

2013 年度　信州大学新任教職員研修【教員】（資料：矢部）

e-Learning の効用と利用の仕方

－ICT 活用による教育の質保証を目指して－

NOTE:

１．教育の質保証

求められる「教育の質」

・学士力

・社会人基礎力

・グローバル人材

⇔　主体的な学び

↓

「21 世紀市民の育成」

「予測困難な時代において生涯学び続け，主体的に考える力をはぐくむ」

（中教審答申：2012 年 8 月 28 日）

⇒　どうする？

★授業において

★授業外では

２．ICT と教育の質保証

◎e-Learning，ICT の活用って何？

e-Learning ＝ electronic-Learning

CAI（Computer-Aided Instruction）

CBT（Computer-Based Training）

WBT（Web-Based Training）などの発展から派生

ICT ＝ Information and Communication Technology ＝ 「情報通信技術」

e-Learning は，ICT を活用した教育（学習）の一つ

◎ICT 活用教育の効率と効果

「教育の質保証」,「主体的な学び」にどうつながる？

◎教育の質保証に向けた ICT 活用の授業デザイン例

★双方向性確保

授業への参加意識

★出席・成績管理

★LMS（Learning Management System）の教材配信，小テスト等

Flipped Classroom と授業参加

★LMS と画像配信

３．ICT を活用してみよう！

◎何ができる？（とりあえず使ってみよう）

⇒ 別紙資料参照

◎詳しくは，**「新任教員向け e-Learning 研修会」**へ

日時：4 月 19 日(金) 16：20～17：50

会場：理学部 2F 大会議室(松本)

その他，教育学部，工学部，繊維学部，農学部の SUNS 会議室 or 講義室

初めての人のためのeALPS（e-Learningシステム）の活用

e-Learningセンターは、研究開発運用部門とICT活用支援部門からなっています。研究開発運用部門では、皆様からの問い合わせへの対応、基盤システムの運用や開発にあたっています。ICT活用支援部門では、ICTを活用した教育方法の提案、活用支援、教材開発などを行っています。

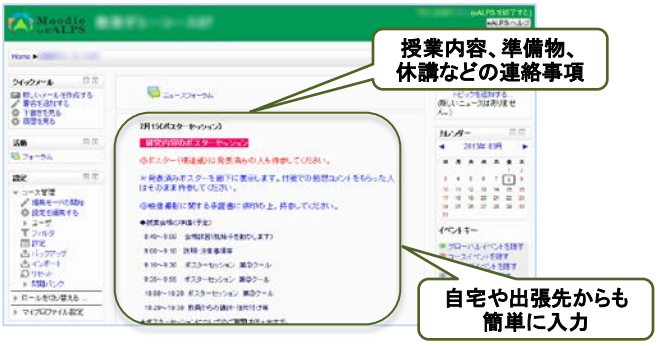
平成25年度新任教員FD研修
(H25.4.2)　資料No.4-2

eALPSで何ができるのか

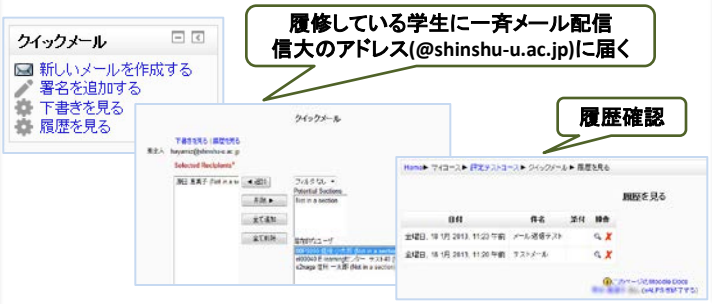
教員 → 学生

1. 受講生へ連絡できます

○ **[トピックスの編集]** でトップページに情報掲載

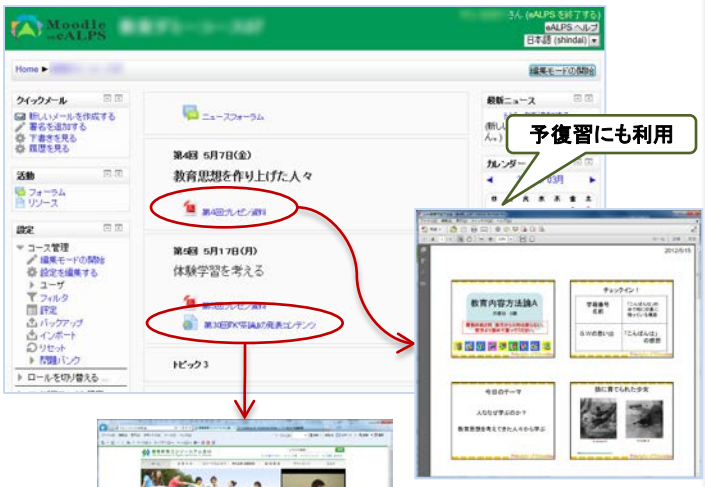


○ **[クイックメール]** で受講者にメール送信



2. 教材を掲示・配布できます

○ **[ファイル]** で教材ファイル（PDF, Word,PowerPoint 等）をアップロード
○ **[ウェブサイトへリンク]** で外部のWebサイトにもリンク可能



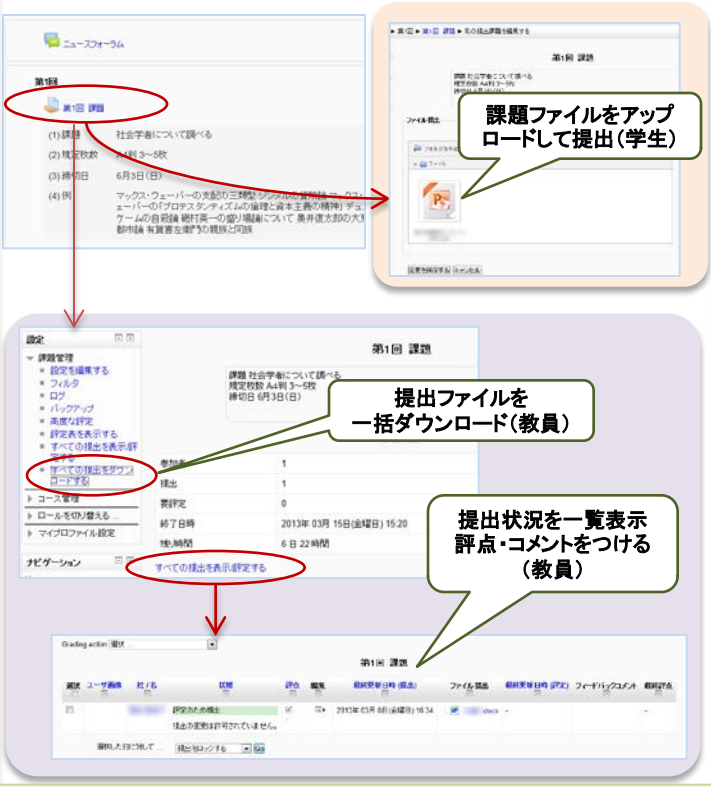
ダウンロードしたPDFファイル

授業に関連するサイト

教員 ← 学生

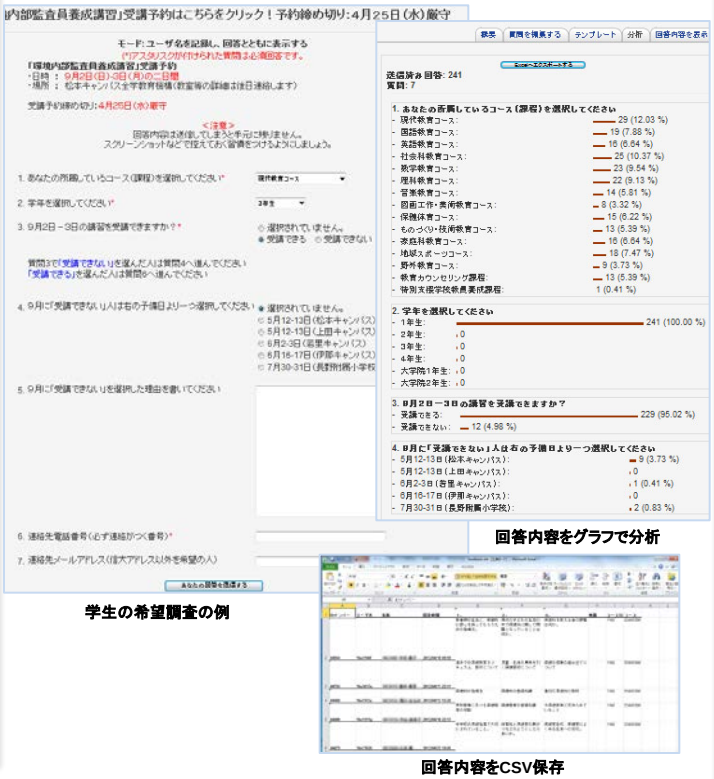
3. レポートを提出できます

○ **[ファイルの高度なアップロード]** で課題ファイルをアップロード



4. アンケート調査が行えます

○ **[フィードバック]** でアンケートや簡単な小テストを実施



学生の希望調査の例

回答内容をグラフで分析

回答内容をCSV保存

教員・学生間の情報交換・共有

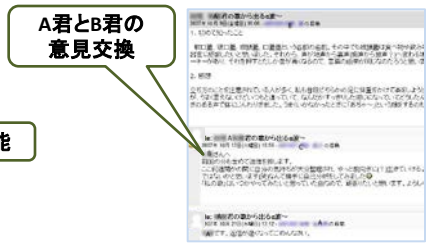
5. 授業の感想・意見を共有できます

○ [フォーラム] に投稿

授業ごとにフォーラムを用意している例

6. 情報の共有と交換が行えます

○ [フォーラム] の返信機能で討論
○ [フォーラム] にファイル添付でレポート提出

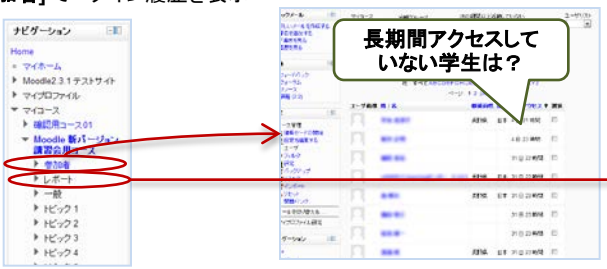


テーマに沿ったディスカッションの例

ファイル添付で投稿の例

クラスまたは個人の学習状況の把握

○ [参加者] でログイン履歴を表示

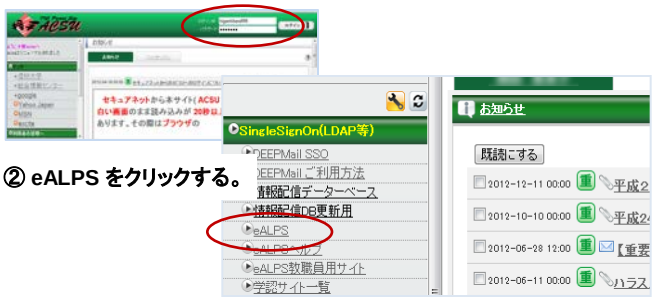


○ [レポート] でコース内の活動の履歴を表示

実際にeALPSを使ってみましょう

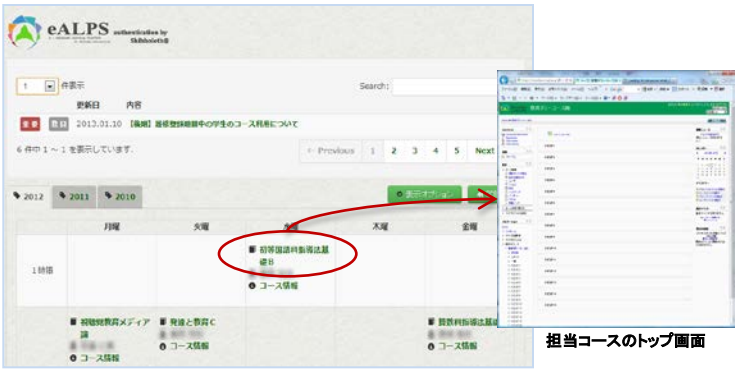
1. eALPSのコースにログインするには

① ブラウザから以下のURLにアクセスし、業務ID(名前＋数字3桁)でACSUにログインする。
https://acsu.shinshu-u.ac.jp/



② eALPS をクリックする。

③ 時間割形式で担当コースが表示されるので、選択してコースに入る。



担当コースのトップ画面

2. お困りの場合には

・ヘルプ＆サポートサイト

・e-Learningセンターの HP
http://www.shinshu-u.ac.jp/institution/e-L/

・e-Learningセンターの e-mail アドレス
elearning@shinshu-u.ac.jp

3. 新任教員向けe-Learning研修会のご案内

日時：4月19日（金） 16:20 ～ 17:50
会場：理学部2F大会議室
SUNS会議室（教育） 工学部200番教室 繊維32番講義室 農学部（会場未定）
* 無線LANに接続可能なノートPCをお持ちください。
* ACSUにログインするための業務IDとパスワードをご用意ください。

履修登録が完了する前に、ぜひご担当のコースにログインして使ってみてください。
研修会のご参加もお待ちしています。

平成25年度新任教員FD研修
(H25.4.2)　資料No.5-2

※サンプル

No.

参 加 証 書

○○　○○　殿

貴殿は下記の FD プログラムに参加
し修了したことをここに証します

記

平成 25 年度新任教員研修
FD 研修「信州大学の教育について」

平成 25 年　月　日

信州大学長

山　沢　清　人